

【ポスター発表】

**肢体不自由当事者とその家族における「自立観」の相違と変遷（2）
ーテキストマイニングと M-GTA を用いたインタビューデータの質的分析ー**

○ 逸見 万葉 (NP0 法人ペアレントメンターかがわ・010053) 野崎 晃広 (四国学院大学・005408)

キーワード：質的分析、テキストマイニング、M-GTA

1. 研究目的

筆者自身が当事者である事を強みとして障害者の自立観の在り方を研究する事とした。当事者は家族の中で育ち、やがて社会に出ていく事になると考えられる。自立観の研究は当事者、その家族、さらに社会の在り方までも含めて考えるべきであろう。本研究は、当事者家族間に存在する自立観が時代の流れとともに変遷を遂げているという立場に立ち、その変遷の一端を明らかにするものである。昨年同タイトル、(1) では「ナラティブ」を用いたインタビュー調査に焦点を当てて発表を行った。その中で今後の課題として、より詳細なインタビューデータの分析の必要性が考えられた。本報告はそれに応えるため、テキストマイニング、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を採用して分析を行った結果を示すものである。

2. 研究の視点および方法

本研究は、当事者家族間に存在すると考えられる自立観の相違とその変遷の一端を示すものである。しかし、論文という形に落とし込もうとした時、意識や観念といったものは非常に厄介であった。「ナラティブ」を用いた質的インタビューのデータを扱うのに適した分析方法を様々に検討した結果、テキストマイニングという量的研究の手法と M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）という質的研究の手法を組み合わせる事とした。以下に、簡単に2つの分析手法の特徴を述べる事とする。

① テキストマイニング

テキストマイニングにはフリーソフトウェアである KH Coder を使用した。その利点として、「正確なデータの全体傾向の把握」、「重要なテキストを探す一助」、「研究としての信頼性の向上」が挙げられる。

② M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）

データに密着した分析から独自の理論を生成し、その理論の実践的活用を目的とする点。

3. 倫理的配慮

本報告は、令和 5 年度四国学院大学大学院社会福祉学研究科に提出した修士論文の一部データを用いたものである。同大学院では、修士学位の審査を研究倫理の審査も含めて実施しているため、独自の研究倫理審査は受審していない。本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業はありません。

4. 研究結果

以下では、当事者の結果を示す。

① テキストマイニング

研究対象者のインタビューの逐語録を年代ごと、属性ごとに分け、それぞれをKH Coderの共起ネットワーク図に描いた。その結果、それぞれの年代ごとに共起ネットワーク図に顕著な違いがみられた。具体的には、年代が若くなればなるほど発している言葉の数が多くなり、言葉と言葉の結びつきも強くなっていた。図1は30代以下当事者の共起ネットワーク図である。「支援」クラスターの出現が大きな特徴であった。

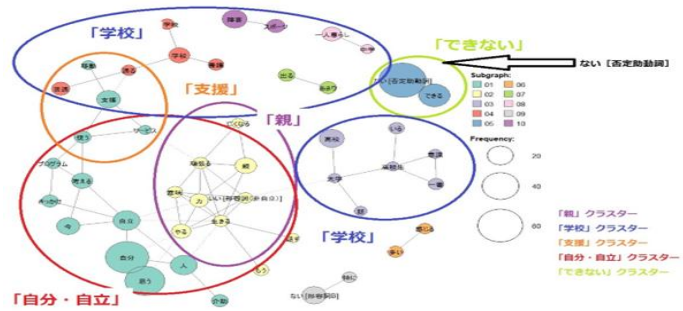


図1 30代以下当事者共起ネットワーク図

② M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)

家族と当事者それぞれに対して実施した半構造化インタビューの発話を、M-GTAにより分析した。通常行われる概念生成、カテゴリー生成、さらに概念図もそれぞれ2組作成された。当事者に関しては5つのカテゴリー、6つのサブカテゴリー、19の概念が生成された。概念間の異同を検討し、また追加すべき概念がないかインタビューデータをそれぞれ3回以上検討し、理論的飽和に達したと判断した。図2は当事者の分析概念図である。

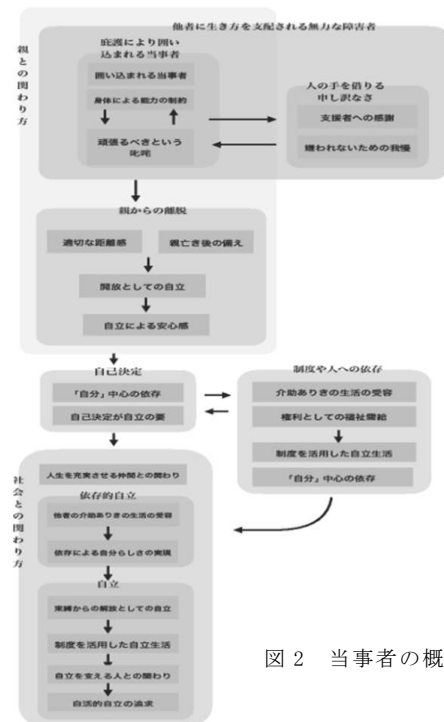


図2 当事者の概念図

5. 考察

以下では、インタビューを行った当事者家族における自立観の相違と変遷について述べる事とする。70代当事者は、彼女の母親が常日頃彼女に言い聞かせていたある言葉がとても嫌だったと語った。「私が死んだら、一緒に死のうね」……。この言葉は、当事者である彼女が「支援」を利用して自立する姿など母親には想像もできなかったからこそ発せられたものであろう。それに対し20代当事者家族に共通して語られたのは、「親は最後まで当事者の面倒を見られない」、「親がいなくなっても自分の力で生活できるように」といった「支援」を受ける事を前提とした将来設計であった。このように、社会福祉制度が整う以前と以後で当事者家族間に自立観の大きな相違がみられた。また、前回の報告(1)でも述べたように、社会福祉制度の整備に貢献したのは先人の当事者たちによる自立生活運動である事に疑いの余地はない。まさに生命をかけた闘いの賜物である。現代を生きる当事者として改めて感服するばかりである。